



TITLE:

性産業に携わる外国人女性たちの 表象とエイジェンシー：在韓米軍基 地村のフィリピン人女性「エンタ ーテイナー」の事例から

AUTHOR(S):

徐玉子

CITATION:

徐玉子. 性産業に携わる外国人女性たちの表象とエイジェンシー：在韓米軍基地村のフィリピン人女性「エンターテイナー」の事例から. コンタクト・ゾーン 2008, 2: 71-88

ISSUE DATE:

2008-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177212>

RIGHT:

性産業に携わる外国人女性たちの表象とエイジェンシー

——在韓米軍基地村のフィリピン人女性「エンターテイナー」の事例から

徐 玉子

1 はじめに

グローバル化は、もの、情報、思想、資本などの国際的な移動とともに、生身の人間の移動も加速化し、国民国家の境界を行き来しながら移住する新たな生活様式を生み出した。国家間の政治経済的な格差の間を移動しながら新しい生活機会を求めて移住する人々の流れの中で、労働条件、人権、市民権などに関する諸問題が台頭している。特に女性は性的身体を資源として境界を越える場合が多いため、より深刻な問題に直面している。

本稿の目的は、韓国京畿道の米軍基地に隣接する村（以下基地村）におけるフィリピン人女性「エンターテイナー」の生活経験に密着したフィールド調査をもとに、売春を含む性産業での出稼ぎの実態について論じることである。E-6ビザ（Entertainer Visa）を所持した外国人女性エンターテイナーが実際に従事するのは性産業である場合が非常に多い。現代の韓国では、「コンタクト・ゾーン」の典型と言える基地村¹⁾で、米兵を相手に性的サービスを提供する女性の87%以上が外国人女性エンターテイナーである。

以下では、まず、いわゆる第三世界から国境を越えて流入し、韓国の性産業で働く外国人女性をまなぞす視線の根底に女性の犠牲者化の問題が潜んでいることを、売買春論と国際人身売買論の2つの議論の流れから指摘し、それが彼女たちを犠牲者として表象するときに連関する重要な問題であることを提起する。つぎに、在韓米軍基地村で働くフィリピン人女性エンターテイナーとのインタビューや参与観察から彼女たちの生活世界を明らかにし、そこから彼女たちが与えられた環境や条件の向上に向けてつねに行う交渉あるいは抵抗、ネットワーク作りといった場面から浮き彫りになるエイジェンシーに注目する。それは、性産業で働く外国人女性に対する犠牲者という一方的で一面的な表象に合致しない。その合致しない部分に着目することは、同時に彼女たちをまなぞす視線の中にある女性の犠牲者化を批判する作業でもある。

2 女性の犠牲者化の問題

2-1 売買春論から

金銭を媒介にして行われるセックスに対しては、さまざまな角度でさまざまな議論が関

わされるものである²⁾。以下に売買春に関わる議論を大きく3つに分けて整理し、批判的に検討したい。①道徳・倫理に関わる議論、②セックス・ワーク論、③社会の権力構造に関わる議論の3つである。

売買春³⁾は、一般に「売春」の問題、つまり、性を売る女性の問題として理解される。従って、買う側の男性は消え去り、売春女性は、社会全体を堕落させる悪の根源であり、道徳的に恥であるとして捉えられる。売春が不道徳であると捉えられる理由は、まず、女性が配偶者である1人の男性とではなく、複数の男性と多くの場合1回限りのセックスをするからである（乱交）。つぎに、売春は、セックスに一番重要とされる相手への感情移入と親密性が欠乏していると思われるからである（性≠愛）。また、「神聖な」あるいは「自然な」はずのセックスを通じて女性が経済的対価を受け取るからある（金銭媒介）。

セックスは社会と時代によって異なる恣意的な基準でその行為の正否が決められる。ある社会と時代においては、複数の男性とセックスするのが必ずしも道徳的に欠陥がある行為として捉えられないこともある。感情移入についていえば、道徳的に何の問題もない夫婦間のセックスでも「愛」を伴わない場合もありうるし、売春女性相手であれ毎晩どこかで愛の告白がなされ、結婚にまで至る基地村の場合を考えると、客と売春女性の間のセックスが必ずしも感情を伴わないものであるとは断言できない。売春女性にとってセックスは、恋愛行為でも生殖行為でもなく、あくまで経済行為であることを考えると、金銭媒介を問題視することはできない。

このような売春に対する道徳主義的な見方はいま現在も一般に広く共有されており、売春に対するそれなりの態度と理論を構築してきた。しかし、これは売春もしくは売春女性を「悪い」から根絶・追放すべき対象として規定するだけで、対案を提示しているとはいえないばかりではなく、スティグマ化を助長している。

売春は「悪だから無くすべきだ」とする道徳主義の主張に対して、売春は悪でもなく無くすべきでもない、労働の一形態だとみなし「セックス・ワーカー」、すなわち売春女性の労働権利を主張する議論が生まれてきた。セックス・ワーク論は売春に従事する女性たちの労働環境の改善や売春女性自身の結束を高めるのに役立った。そして、その主張は、売春女性の立場による自己決定の尊重から性的な治療者の専門家としての売春女性、さらに女性の性的解放の旗手にまで及んだ。セックス・ワーク論に欠けているのは、ジェンダーをめぐる権力関係が作り上げている現実に対する分析であろう。売春女性を労働者と捉えることで、特に女性が直面している諸問題を無視してしまうことになるのである。

一方、売買春を男女不平等の最も極端な例であり、男性による女性抑圧の最も露骨な現象であるだけでなく、女性に対する男性の権力行使の極大化をもたらすものであると捉える人々がいた。この立場の人々は、従って、男女平等社会の実現のために売買春は障害になるので追放すべきだと主張する。彼女らは、「セックス・ワーク」を労働として捉えず、体を市場に売り出される「性奴隷制」と主張する。ここでは売春女性は家父長制の犠牲者とみなされる。売春を「性奴隷制」と捉える立場に認められる最も大きい誤謬は、当事者である売春女性たちの声に耳を傾けない点である。そのため、さまざまな権力構造の中で一人ひとりの売春女性自身が行う選択や交渉などが不可視化され、単なる社会構造

の犠牲者として説明される。

売春女性たちについての犠牲者という一面的なイメージで見られる問題を克服するために要求されるのは、具体的に売春女性たちが自らの生についてどのような解釈と意味付与をしているのかに注目することである [Sturdevant & Stoltzfus 1993]。

そこで、本稿では、社会的・文化的に沈黙を強要されてきたフィリピン人女性エンターテイナーの声に耳を傾け、その語りから売春女性たちが単なる社会構造の犠牲者であるわけではなく、そうした側面を否定するものではないが、むしろいままでも無視されてきた自らの歴史を作っていく多様なエイジェントである側面に目を向けたい。セックス・ワーク論における労働者としての売春女性は、こうしたエイジェントのひとつのあり方にすぎない。

2-2 国際人身売買論から

韓国社会で、基地村で働く外国人女性エンターテイナーは見えない存在として不可視化されている。外国の軍隊の駐屯を拒否できない社会は、「国家安保」のために外国人（男性）兵士を性的に満足させるサービスを提供するのが当然とみなしている。だから、米軍駐屯とともに存在し続けた韓国人女性の「米軍慰安婦」⁴⁾に対しても見てみぬふりをし続けた。

1980年代から基地村の景気は悪くなる一方で、経済成長とともに韓国社会での賃金が相対的に上がった結果、韓国人女性は基地村から撤退し、代わって1990年代後半からは外国人女性が基地村の性産業に進出してきた [Lee 2006: 187-188]。そのため、基地村の売春問題は1990年代から注目されつつあったが⁵⁾、外国人女性が売春に従事することによって、再び無視されることになった。というのは、もう基地村で売春をする「可哀想なワガムスメ」はいなくなったので、基地村で何が起ころうと完全に「彼ら」の問題であると放置できるようになったからである。性的搾取が行われようが、女性に対する暴力が振るわれようが、民族主義的な韓国人にとって、それは声を荒げる必要のない出来事なのである⁶⁾。

こういう状況において基地村で働く外国人女性の人権問題が注目されたきっかけが、韓国社会の内部からではなく、外部からであったのも当然である。2001年7月、アメリカの国務省による国際人身売買の実態に関する報告書の中で、韓国が「最悪の人身売買国」と指定されたのである。この報告書は、韓国をインドネシア、コンゴなど22ヶ国と並んで最下位の等級に分類した⁷⁾。これに対する韓国の言論は、「恥である」とか、「経済と人権水準がわが国より劣るアジア・南米の後進国より道徳的に劣等な国として指定されたのは、経済発展による倫理的墮落を外部から確認させられたのと同じだ」という論調の記事を載せている⁸⁾。韓国で外国人女性の人権侵害の実態が深刻であることに衝撃を受けたというより、「後進国」と並んで最下位に韓国が位置付けられたことに衝撃を受けたようである。

冒頭で述べたように、外国人の売春女性はE-6ビザで入国する。E-6ビザに関する法律が定まったのは1994年で、実際発行され始めたのは1996年である。表1から明らかなように、1999年から発行数が急増するのは、当初は許可制であったが、1999年から推薦制に変わり、ビザが乱発されたからと見られる。

表1 年度別 E-6ビザの入国者数

年 度	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
入国者数	2,105	4,486	7,044	8,586	6,452	4,640	3,943	4,759

『出入国管理統計年報』1998～2005参照。

E-6ビザの発給開始からこの報告書が発表されるまで5年ぐらい経っているのに、「国際人身売買」と関わる外国人女性の人権問題は言論にめったに取り上げられてこなかった。⁹⁾しかし、報告書の公表以後は、いろいろな新聞や雑誌、テレビ放送などでも大きく取り上げられ、各種会議が国内外で開催された。外国人女性の人権を考えたからか、それとも「国際人身売買国」に指定されたために傷つけられた国粋主義的な自尊心のせい、その対策は迅速に行われた。報告書の発表から1年経たないうちに、韓国は「飛躍的發展」が認められ最上位の1等級に再指定された。¹⁰⁾

外国人女性の人権侵害の問題が生じている主な場所は基地村である。この現実、すでに述べたように、外国の軍隊を性的に満足させるために外国人女性が動員され、自国民女性を守ることができるという理由からである。そこに意図された「社会的無知」¹¹⁾の状況が生み出された。それが、「国際人身売買」という国際問題に関連して社会的に注目され、可哀想な「国際人身売買の犠牲者」像が現れた。その結果、E-6ビザこそが「奴隷ビザ」であり、その発給を廃止すべきだという対策が主張されることになった。すなわち、「外国人女性のための人権連帯」の代表は、「E-6ビザで入国した外国人女性が外国人専用クラブ（基地村のクラブ）、観光ホテル、ナイト・クラブなどで働きながら、人権を蹂躪されている」と報告している。「基地村や遊興業所に人身売買され、性売買を強要される外国人女性は大体 E-6ビザの所持者」だから、「遊興業所の就業外国人には E-6ビザの発給を廃止すべきだ」と主張した。¹²⁾こうして、2003年6月1日に、E-6ビザの中でダンサー・ビザの発給が中断され、入国者数も前年に比べ3分の2に激減する。

移民研究では、女性は男性との関係で、または家族の一員として従属的に移動してきたと、長い間捉えられてきた。それが、グローバル化とともに国際的な移住労働（いわゆる「外国人による出稼ぎ」）が増える一方、女性単独の移住も多くなり、「移住の女性化」¹³⁾に関する議論が行われるようになった [Willis & Yeoh 2000; Kim 2004; DAWN 2005]。例えば、フィリピンの場合、1975年に海外移住労働者（外国人出稼ぎ者）の10%を占めていた女性の割合は、1987年には47%に至り、1995年には半数以上を占めている [Ruiz-Austria 2006]。男性の場合、移住労働は故郷に就職口を見つけられない経済状況を超え、経済的安定を求めるチャレンジ精神に富んだ価値ある行為として捉えられている。たとえ移住先では過酷な労働条件の下で働いているとしても、男たちはその苦難を乗り越えて未来を開拓する勇気ある人間として捉えられる。¹⁴⁾しかし、女性が男性に従属しないで、単独で稼ぎ口を求めて移動し始めるや否やものごとは複雑になる。女性はもともと主体的に行為する人間として認められていないので、女性の移住をめぐる言説は、彼女たちを国際人身売買の犠牲者としてしか表象できないのである。彼女たちの移動・移住は、選択でもなんでもなく、国際犯罪組織に騙されて無理やり移動させられ、性産業で働かされる可哀想な犠牲者としてしか扱われないのである。国際人身売買の言説の根底には、女性をエ

イジェントとして認めようとし、ない、「女性の犠牲者化」という、女性に対する「一番洗練された他者化」の論理が置かれているように見える [Jeong 2005: 39]。このような言説は、性産業での移住労働者が置かれている環境¹⁵⁾の中でつねに行う選択や交渉などを見えなくしてしまう。それだけでなく、このような異質な者に対する他者化、そして、その他者に対する潜在的な嫌悪感は、非現実的な打開策を招く恐れがある。すでに述べたように、国際人身売買の犠牲者を苦境から「救出」し、故郷に帰らせることと、新たな犠牲者が現れないように、女性の移動を最初から封鎖する形でE-6ビザの発給を廃止するのもこれに当てはまるだろう。無理やり移動させられ、売春を強要されるのは疑う余地もなく多大な人権侵害である。ところが、持続する故郷の経済低迷で他にチャンスがなく、故郷を離れてより豊かな生活と未来を手に入れようとする人間に最初からその移住のチャンスを封鎖するのはその人に対する人権侵害にならないのだろうか。成すべきことは、故郷でも経済的安定を望める就職の機会を広げることができるように政治経済的基盤を整えることと、海外移住労働を選択する人々がさまざまな搾取や人権侵害からできるだけ守られながら仕事ができる環境を整えることではないだろうか。

まとめると、韓国社会では基地村の外国人女性エンターテイナーの存在が不可視化されていること、そして、可視化されても無力な犠牲者として表象されているところに問題がある。そのため、「犠牲者」を「救済」し、帰国させたり、E-6ビザの発給を廃止したりというような非現実的な解決策が主張され、実施されてきた。

本稿は、韓国の基地村というコンタクト・ゾーンで働くフィリピン人女性エンターテイナーの語りから彼女たちの生活世界を可視化し、その中で繰り上げられる彼女たちの選択や交渉などを明らかにすることで、彼女たちを単なる犠牲者として捉えず、エイジェンシーを認めながら、より現実的な支援や政策実現につながる方途を探りたい。

3 調査地の概略

首都ソウルから南に約80 km 離れた京畿道の平澤には7,194 km² (約1,781エーカー) 規模の Osan Air Base (K-55) と4,950 km² (約1,225エーカー) 規模の Camp Humphreys (K-6)、射撃訓練所、通信所、弾薬庫 (あわせて約733エーカー) がある。この5つの米軍基地は15,107 km² (約3,739エーカー) の供与地を使用しており、12,091名の米兵と軍属が駐屯している¹⁶⁾。調査を行った基地村はK-6周辺に形成されている。2005年3月末現在、人口は7,406名である¹⁷⁾。その中で、基地と直接関わっているのは、米兵の日常品を調達する商店と、米兵に部屋を貸すレンタル業、または米兵のR&R (Rest & Recreation)¹⁸⁾に関わるクラブやバーの経営に従事する人々である。村には11軒のクラブと28軒のバーがある。

以下にフィールドワークの様子を簡単に示したい。筆者は花美里 (仮名) という基地村に滞在し (2005年3月から2007年12月までの間、合計14ヶ月間) フィリピン人女性たちと日常的な接触を持ちながら生活してきた。花美里に居住する多くのフィリピン人女性たちと道端で挨拶を交わす仲になり、その一部とは誕生日などのパーティに呼び合ったり、家

で一緒に料理を作ったりするほどの親しい関係になった。

花美里に住み始めたときには、道端でフィリピン人女性と会っても話しかけるのをためらった。それは、彼女たちが当面している状況を十分に把握できていなかったから、筆者と話したことが知られて不利益を被るかもしれないと思ったからである。クラブで会って話すのが一番いいと思ったが、女性が一人でクラブに入ると怪しまれるかもしれないので、知り合いの男性と一緒にクラブに来てもらった。そして、彼女たちにドリンクをおごったりしてから話しかけてみた。筆者は事情を話して自由時間に外で会う約束をとって電話番号を交換した。そして、彼女たちがいつも監視されているわけではないこと、筆者と午後の時間を過ごせるということを知ってから気軽に道端でも話しかけることができたのである。

4 フィリピン人女性エンターテイナーの生活世界

この章では、韓国の基地村でエンターテイナーとして働くフィリピン人女性の生活世界を描きたい。職場であるクラブと居住環境、移住動機と過程、仕事の形態と雇用構造、そして、現実適応と受容の項目に分けて順に記述する。¹⁹⁾

4-1 職場の風景と居住環境

R&Rの施設は大きくクラブとバーとに分けられる。クラブはまず規模が大きく接待役の女性数も多い。バーに比べてもろもろの性的サービスが期待され、女性はドリンク・マネーをもらうためにお客に飲料を買わせる。そのためにクラブで働く女性たちはジュエシー・ギャルと呼ばれる。規則はきびしくないが、1杯当たり20分の目安で接客するという。1杯65 ml程度のドリンクは10ドル（U. S. ドル。以下ドルはすべて U. S. ドル）で、そのうち女性に渡るコミッションは、国籍によって異なる。フィリピン人女性が2ドル、ロシア人女性が3ドル、韓国人女性が5ドルである。すなわち、フィリピン人女性は比較的英語が話せるし、基本給も安いから好まれる。ロシア人女性は言葉が通じないが、西洋人の容貌がお客、特に韓国人男性に好かれる。²⁰⁾雇用主から見ると、韓国人女性は割に合わない。海外からの女性たちの基地村への流入を背景に、韓国人女性たちは基地村を離れるようになった。こうして、現在クラブで働く女性たちの大半はフィリピン人女性である。

クラブのドアを開けて中に入ると、50代、60代のウェイトレスが空いているテーブルに案内し、座るや否やトップと超ミニのスカートといったセクシーなコスチュームの女性がテーブルに座って話しかけてくる。彼女たちはドリンクを飲むだけでなく、米兵のひざの上に座ったり、キスをしたりして、「特別なサービス」もする。クラブの中央にはステージがあって、その真ん中には天井からポールが降りている。そこで、ダンサーは裸体に近

表2 クラブ別フィリピン人女性雇用者（2005年8月現在）

クラブ名	U.S.A	VIP	エイス	オリンパス	DMZ	BMW	クラウン	エンゼル	ニューワールド	UP	アマゾン	総計
人数	6	5	9	5	8	10	8	8	13	12	10	94

い姿でポール・ダンスを踊るのである。クラブの女性が順番にダンスをするのだが、1人3曲踊らないといけない。

フィリピン人女性たちは大体クラブの2階に住み込んでいる。2階に通じるドアはクラブの外の裏道に面しており、ドアの隣の壁には、「PLS DO NOT DISTURB THEIR PRIVACIES」と書かれてある。部屋の中にはダブル・サイズのマットレスが2つ敷かれていて、ひとつを複数（通常2人）で共有する。この2階の3つの部屋に13人の女性が生活していた。家具は他に何もなく、女性たちは旅行用のトランクを箆笥代わりに使っていた。

4-2 移住動機と過程

フィリピン人女性たちが海外移住労働を選択する要因にはいかなるものがあるだろうか。

韓国に来る前に私は NGO 団体のボランティアとしての仕事をしていた。貧しい子どもたちを教える仕事だったが、私は月60ドルを給料としてもらった。でも、あなたも分かるように私には3人の子どもがいる。到底生活できなかった。

(ステファニー, 27才)²¹⁾

私はバンドでシンガーとして働いていた。給料は月3,000ペソ（2004年、約7,500円）だった。それでは4人の子どもを学校に行かせることができなかった。

(リリー, 30才)

上記から確認できるように、フィリピン人女性たちが韓国の基地村に流入する最も根本的な理由は経済的要因にあると語られる。そして、持続するフィリピンの経済的低迷と、娘に家族扶養の義務を負わせるという伝統とがあいまって、女性たちを海外移住労働へと押し出していると説明される [Paek 2000; DAWN 2005; 武田 2005]。そのような視角に従うと、女性たちはフィリピン社会の経済的な犠牲者であると取られるかもしれない。しかし、海外に行くという決定は、より豊かな未来への期待と未知の世界に積極的に挑もうとする女性たちの挑戦として捉えられないこともない。ウェイトレスとして働いている金貴子さん（韓国人、61才）は、「あの子たち（フィリピン人女性たち）、それでも頭が回るから出稼ぎに来ている。そうでしょう？頭が悪くて何も考えられない子はここまで来ないよ」と評価していた。

女性が移住労働を選択する理由に対する従来の説明は、先の語りからも明らかなように、経済的要因（貧困）と文化的要因（家族扶養の義務）が多数を占めていた。つまり、女性の移住決定要因を社会構造的な要因で説明している [Paek 2000; DAWN 2005; 武田 2005]。それに対して、最近の研究は故郷で女性が経験する抑圧的な環境や家父長制による暴力など、新たな社会文化的要因とともに、未来に対して肯定的に思考し、それを実現しようとする女性自身の努力など、より個人的な要因を指摘し強調している [Suzuki 2002; Cheng 2002; Yea 2003]。つまり、個人の選択を重要視し、個々人のエイジェン

シーに重きを置く議論であろう。ここで重要なのは、個人の移住の選択が故郷での貧困と失業という経済的な要因だけで説明されるわけではなく、それらの構造的要因とともに、個人の未来に対する想像などの非構造的な要因との間の相互作用によって行われるというふうに理解することであろう。

移住決定要因が何であれ、女性が海外移住を考えると、女性を求める職種は非常にジェンダー化された仕事に限られているので、選択できる仕事の範囲はそれほど幅広くない。そのためにフィリピン人出稼ぎ労働者の50%を占める女性はドメスティック・ワーカーやエンターテイナーのような仕事を選択する。

父親は、娘のマリア（28才）がカレッジを卒業するとマニラの会社に就職して普通に事務職員になってほしかったが、本人はエンターテイナーとして日本に行きたかったので、喧嘩が絶えなかった。彼女にとって普通の事務職の仕事は退屈そうに見えたし、世界を見てみたいという気持ちがあった。

マリリン（27才）は、マニラにあるAAAマンパワー・エイジェンシーという業者に登録して1ヶ月間の訓練を受けた。そして、規定の試験に合格して芸能人登録証（ARB-Artist Record Book）をもらった。

彼女たちは、エンターテイナーとしての海外移住労働を積極的に選択したように見える。誰かに騙されてエイジェンシーに連れて行かれたのではなく、自分で評判の良いところを訪ねて行った。そして、一生懸命歌の練習をした。ここに見られるのは、自分の生に積極的に向かい合って努力する女性の姿ではないだろうか。このような姿を無視して彼女たちを「人身売買の被害者」と一方的に語ることは妥当とは言えない。

4-3 雇用構造と仕事の形態

ここでは基地村のクラブで働くフィリピン人女性の生活を理解するため、雇用構造と仕事の形態とを説明する。

彼女たちはクラブ・オーナーと直接雇用関係にあるのではなく、フィリピンの業者と韓国のプロモーターを通じて契約関係に入る。クラブ・オーナーは韓国のプロモーターに女性の給料を月1,200ドルぐらい支払い、女性はプロモーターから月500ドルを受け取る。残りの金額はフィリピンの業者と韓国のプロモーターで分配する。

同じクラブで働いていても女性たちは何組かに分けられ、異なるマネージャー²²⁾がついており、女性に何か問題が生じて、それはマネージャーが処理しなければならない。これによって、オーナーと女性たちの直接的な対立は避けられる。これは、女性たちによってオーナーが敵対視されない方法でもある。他に重要なのはママさんと呼ばれる女性である。彼女はクラブの実質的な運営者で、クラブのオーナーであつたり、オーナーの親戚であつたりするが、フィリピン人女性たちの管理を担当し、特に客とナイト・アウト²³⁾の交渉に応じ、フィリピン人女性に強制したりする。性売買特別法²⁴⁾の施行以前はウェイトレスの一人が女性たちの管理とナイト・アウトの交渉を担当し、ママさんと呼ばれていたが、単なる使用人である身分なのに売買春斡旋の重罪に問われるのは誰も望まないからオーナーか側近の人が担当するようになった。

フィリピン人女性たちは、平日は午後5時から夜中12時まで、週末は午後3時から深夜1時までクラブで働く。月2回平日にのみ休暇が取れる。1日中、彼女たちは携帯にかかりっきりである。米兵の「ボーイ・フレンドたち」との電話や携帯メールのやり取りで忙しいのである。寝る間も惜しんで彼女たちは彼らを管理しなければならない。ベイビ（24才）は、米兵たちが夜中もずっと電話をかけてくるので実際寝られるのは朝方になってからだと不満をこぼしていた。

彼女たちは契約のときに自分たちの仕事が夜の仕事で、クラブで働くことは知っていた²⁵⁾。しかし、ほとんどの場合クラブで歌手として歌う以外に何をしなければならないのかについてあまり知らないまま韓国に向かう。そして、飛行機の中で、初めてクラブ内でセクシー・ダンスを踊らないといけないと聞かされる。最後まで売春については言及されない。

私は韓国に来て最初2週間をDDC（京畿道北部の基地村）のクラブで働いた。ママさんは私にドリンクを売することを命じた。そのとき私は初めて、あ、私は歌手として歌うエンターテイナーではないんだと気付いた……私は努力した。でも、私はドリンクを売ることができなかった。ママさんは毎日大声で怒鳴った。2週間後私は他のクラブに移された。（リリー、30才）

1回は踊ることを拒否した。正確には拒否ではなく、踊りが上手ではないからと理由付けた。1回目は踊らなくて済んだ。2回目は、踊らないとクビになると言われ、踊るしかなかった。（ジャスミン、27才）

彼女たちは仕事の内容がフィリピンで聞いていたのとは異なることに気付く。しかし、自分でサインした契約書のことを思い出し、どうにか新しい環境に適応しようと努力する。契約書には韓国へ出発する直前にサインする。契約期間は1年間で、契約破棄の罰金は2,000ドルである。帰国の経費も自費で賄うしかない。それに、彼女たちには多額（約1,000～1,500ドル程度）の借金がある。というのはフィリピンの業者に渡韓諸経費や手数料、そして芸人登録証をもらうための訓練期間中の生活費などを立て替えてもらったので返済しないといけなからである。その金額はフィリピン人女性がエンターテイナーの仕事を辞めてすぐに返せる金額ではない。だから、女性たちはいかなる不当な労働形態や内容でも、我慢して契約期間働くことを選ぶ。

女性が働くという選択をしたら、現実を受容し、それに適応するしかない。女性たちはドリンクを売らなければならない。彼女たちは給料の500ドルを手付かずで故国に送金し、ドリンク・マネーを生活費に当てたいが、実際はそううまくはいかない。

〔平日は〕1日最低7杯売らないといけな。今夜はこれで3杯目。週末はまあまあいいけど、平日は……こどもたちに送るお金がない。（リリー、30才）

クラブのオーナーはもっとドリンクを売らせるためにクォータ制を取り入れる。悪質なクラブではそれを満たせないとドリンク・マネーを払わなかったりもするが、花美里の基地村ではコミッションは払うけれども人前で怒鳴ったり、クラブの中で座れない罰則を加えたりする。クラブ・オーナーはたくさんのドリンクを売するために女性たちに「特別なサービス」を行わせようとする。女性たちにとってもドリンク・マネーは欠かせないものだから、この要求に従うことになる。

彼女たちは最初の2、3ヶ月間はまったく給料を受け取ることができない。それは、契約書で彼女たちが渡韓の諸経費を給料から差し引くことに同意したからである。お金が必要な女性たちを誘惑するのは、クラブのもうひとつの労働形態である「2次」と呼ばれる売春である。新しく編入された女性はそのクラブに「2次」という制度が存在することすら知らない。

ある日消防隊勤務の人が、私が気に入ったと。「ハウマッチ？」と聞かれた。私はビックリして何を言っているのかさっぱり分からないといったら、彼から、「ここのクラブでは女性とナイト・アウトすることができると、普通250ドル払う」と聞かされた。私は本当に本当に驚いた。「私はクラブで働くエンターテイナーであってセックス・ワーカーではないんだと、だからあなたとナイト・アウトはできないんだ」と言った。私は自分が稼いだお金を尊重したい。私はそのお金で兄と弟をカレッジに行かせた。²⁶⁾こどもたちもそのお金で食べさせている。もし、私が売春でお金を儲けたらそのお金を尊重することができない。……でも、大きいお金が入るから誘惑ではある。リリーがあなたに話すかは分からないが、たぶん彼女は1回経験していると思うよ。

(ジャスミン, 27才)

韓国では2004年9月から、性売買特別法が施行された。その趣旨は、売買春斡旋業者への処罰の大幅強化と、「性売買被害女性」への人権保護の二軸から成立している。その影響で「2次」は話題に乗せにくくなっており、女性が「2次」を固く拒否したらクラブ・オーナーもあからさまな強制はできなくなっている。それにも関わらず、女性たちは依然として物理的な制約を受けている。それらの諸規則は女性の労働を統制するだけでなく、移動の制限やセクシュアリティの管理にまで及ぶ。女性たちが仕事に遅れたら5分ごとに1ドルの罰金が科せられる。そして仕事を休むときは250ドル支払わされる。また、ベッド・チェックというのがあって、夜中ママさんが不意に寝室に入って全員いるかをチェックする。そのとき不在だと、100ドルの罰金を払わされる。ママさんやクラブのオーナーは、基地村は夜中歩き回るのは危ないから皆の安全を考えてこそベッド・チェックをするのだと言うが、本当の理由は女性が米兵と恋愛関係を結ぶことを規制することにある。たとえば、恋愛関係になったとしても、泊まりを仕事の一部にさせて（ナイト・アウトという形で）クラブにお金を入れるように要求する。

4-4 現実適応・受容

以上のような苛酷な環境に彼女たちを適応させるのは、家族への思いと未来に対する肯定的な想像である。

私の家族は私に感謝している。私が働いたお金で兄弟は教育を受けられるし、家族は食べるのには困らない。私はお金を送った後家族に電話するときが一番幸せ。

(ジャスミン, 27才)

別に〔米兵と〕結婚したいとは思わない。こどもが4人いるから、フィリピンに戻って稼いだお金で小さい店でも開くことができたらと思っている。(リリー, 30才)

最近は基地村の景気がよくないのも手伝って、クラブから逃げる女性も多くなっている。クラブから逃げ出した女性の中には米兵のボーイ・フレンドのアパートに転がり込んでビザが切れるまで同棲する人もいる。中には契約違反金を払ってもらい同棲するカップルもいる。その場合、米兵のボーイ・フレンドが月300ドルから500ドルくれるから、クラブで働くより楽である。しかし、そのような同棲が恋愛感情をもとにしているのか、ある種の契約に基づいているのかは不明である。

ママさんは、フィリピン人女性は米兵と結婚するのが目的だから、ドリンクを売ろうとはしないと文句を言う。実際若い女性ほど米兵と結婚することを願うようである。枕元の壁には「本命」の写真が貼られている。²⁷⁾

5 抵抗あるいは交渉

契約に従って働くことを選んだ女性たちは現実を受容し適応するしかない。しかし、女性たちは与えられた現実をそのまま受け入れるのではない。過酷な現実を自分が適応しやすいものにできるだけ変える努力をしている。例えば、彼女たちはより良い条件を求めて米兵との同棲を選択したりする。ここでは女性たちのそのようなしたたかさに注目する。

フィリピン女性たちはエンターテイナーとして韓国で仕事することに合意して契約書にサインした。しかし、それは舞台の上でポール・ダンスを踊ることやクラブ内で「特別なサービス」を行うこと、そして、お客とナイト・アウトすることに合意していることにはならない。ところが、契約期間を満たすためには、侮辱的な仕事を受けてやり遂げないといけない。このような状況で自分の自尊心を守る方法のひとつは、エンターテイナーとしてのアイデンティティを保持することである。²⁸⁾「I am an entertainer」だから、お客を喜ばせるのがエンターテイナーの仕事なので、仕事として笑えるし、踊れるし、嘘もつける。しかし、「I am not a sex worker」なので、本当のボーイ・フレンド以外の人とナイト・アウトはしないと言う。

無礼なお客をどのようにあしらったのかが、しばしば誇らしく語られる。

〔お客が〕私の身体を触ったりして無礼だったら、私はその人を見つめながら言うの。私はあなたが触ってもいいような女性ではないと。それでも続けたら私は何も言わずそのテーブルから立ち去る。
(ダイアナ, 22才)

あなたは賢くならないといけない。私は私の身体に触ろうとする人がいたら場の雰囲気を一変させて笑わせる。その手を取り払って立ち上がって、踊りましようと言いながら可笑しいポーズをとって笑わせる。(お客と一緒に) 踊るときは両手を取って踊る。相手の手を暇にさせない。
(ジャスミン, 27才)

クラブ・オーナーに対しては、以下に見るような抵抗の形態がある。

まず、彼女たちは自分と私的な関係に入れそうなお客にはドリンクを2杯以上買わせない。それは20%しかドリンク・マネーを払わないクラブ・オーナーに対する目立たない抗議でもあるし、その米兵には、「あなたから金を取る気はなく、個人的な関係を大事にしたい」というアピールにもなる。

つぎに、クラブ・オーナーが悪質な場合、彼女たちはマネージャーに条件のいいクラブへの移動を頼むことができる。より良い条件のクラブについては口コミで情報を得るのだが、条件のいいクラブに移ったとしても基本的な構造は変わらないので、積極的な抵抗の方法とは言えない。しかし、これは彼女たちが利用できる数少ない抵抗の方法のひとつではある。

リリー(30才)は、基地村の稼ぎに満足できず、釜山にある別のクラブに移った。新しいクラブは、米兵ではなく韓国に滞在している外国人技術者やビジネスマンを相手にするクラブであった。彼女は以前このクラブで働いた女性から情報を聞いてマネージャーに頼んだという。彼女はここで売り上げトップを維持して、月2,000ドルを国に送金した。新しいクラブではナイト・アウトという制度はない。しかし、毎日20~30万ウォン(2万4千~3万6千円程度)のお酒を買ってもらったらセックスせざるをえない。しかし、その場合でもセックスそのものにお金払われるわけではないから、セックス・ワーカーではないというアイデンティティを守ることができる。

これより積極的な対応と見られるのは、クラブから逃げ出して大使館などの機関に強制売春を告発することである。そうなった場合は、クラブに調査が入り、オーナーは法的処分を受ける。しかし、クラブから逃げ出す女性がすべてそのような積極的な方法を取るとは言えない。それより、米兵と同棲しながらビザが切れるまで隠れて暮らすほうが多いと思われる。

6 ネットワーク作り

フィリピン人女性たちはそれぞれ多様な動機と形で基地村に入って来て仕事をする。ところが、世間は彼女たちに強い烙印を押し、社会から排除しようとする。このような状況で彼女たちがお互いの立場を理解し合い、助け合い、抵抗するために、人とのつながりが

必要になる。彼女たちはそれぞれの状況で人とつながるネットワークを作り、活用する。この章では基地村のフィリピン人女性たちが人とつながり、ネットワークを作り上げる実践に注目する。

Pinoy Shop（仮名）は営利を目的にする店舗である。このため、フィリピン人女性の憩いの場所として取り上げるのは無理があるように思われるかもしれない。しかし、韓国内で外国人労働者のための施設や団体が絶対的に足りない状況で Pinoy Shop はフィリピン人女性たちが似たような状況にいる女性たちと接点を持ち、情報を交換し合う場になっている。

Pinoy Shop はビルの2階に位置し、60坪くらいの広さである。商品としては主に女性用の服や化粧品、国際電話カード、日用雑貨、フィリピンの食材などを扱っている。商品の展示スペースについて場所をとっているのがテーブルとソファである。それらのすぐそばにはコーヒーやお茶や紅茶と湯と玉子が置かれていて、誰でも自由に飲んだり食べたりできるようになっている。その片隅にはパソコンが1台置かれており、いつでも無料でインターネットが使えるようになっている。フィリピン人女性たちはここで国の家族や友人たちにメールを送ったりしている。狭い部屋を何人かの同僚と一緒に使っている彼女たちにとってはこのショップは自由時間の休憩場になっている。新しく花美里に到着した女性はここでいろいろな情報を手に入れる。クラブでの労働、米兵との同棲や結婚、逃亡後のことなどについて比べることもできる。ママさんと相談できない緊急な問題が生じた場合もこの場に来て仲間と話し合う。筆者はここで韓国では中絶が合法か不法か、どこで中絶手術ができるかなどを聞かれた。

彼女たちはフィリピンの家族に頻繁に国際電話をかけて自分が一人ではないことを確認する。毎月の送金も家族や親族とのつながりを確固としたものにし、フィリピンに戻ったときに新しい位置を確保する役割を果たす。本国の人々との関係維持にはインターネットのメールやブログなども使われる。彼女たちは自由時間にネットで故郷の友人とチャットをしたり、写真を交換したりする。

一部の女性たちは村の教会に通いながら仕事以外の人間関係を上手に結んでいる。もちろんフィリピン人女性の仕事からくるイメージがよくないためすべての人とうまくいくとは言えない。筆者はある女性が入れ歯をなくしたときに電話で相談され、病院に一緒に来てくれるように頼まれた。筆者のような韓国人にもネットワークを広げようとする努力が垣間見える出来事だった。

フィリピン人女性たちのネットワーク作りの一番強力な相手はお客である米兵である。クラブからの逃亡は一般に彼らの援助のもとで行われる。米兵との結婚によって道徳的に疑わしいエンターテイナーから合法的な地位である「主婦」へとカテゴリーの移行も可能になる。

青山はタイの売春女性に対するインタビューをもとに書いた論文で、売春の当事者にとって客観的な条件である「ネットワークの喪失」が起こったとき、奴隷状態が主観的に感知され、それが O'Connell Davidson のいう「社会的な死」であると論じた〔青山 2005〕。「社会的な死」を回避するためにもネットワーク作りとそれを維持することの意味は大き

い。

7 おわりに

冒頭で、外国人女性エンターテイナーの多くが実際、性産業で働くことを考えて売買春論を検討した。まず、道徳・倫理に関わる議論が売春女性のスティグマ化を助長することを指摘し、つぎにセックス・ワーク論にはジェンダーの視点が欠けていると批判した。さらに、ジェンダーに関わる議論が、権力を強調するあまり売春女性のエイジェンシーを無視し、犠牲者化されがちな点を指摘した。また、国際人身売買論もそれと同じ文脈に置かれていることを指摘した。

本稿は、外国人女性エンターテイナーが被害を被っていることを否定しているのではない。つまり、彼女たちが犠牲者ではないという主張をしているのではない。被害や犠牲を被っている事実に対しては、それがどのような要因によって重層的、複合的に作り出されるのか、その被害は、犠牲はどういうものであるのか、どのような結果をもたらすのかなどについて具体的なレベルで追求される必要があるだろう。本稿を執筆するに当たって問題にしたかったのは、外国人女性、売春女性に対する「犠牲者化」であり「他者化」であり、それが彼女たちをさらに周縁化してしまうのではないかという問いかけである。

本稿は、韓国の基地村で働くフィリピン人エンターテイナーのインタビューや観察から、彼女たちが単なる社会構造の犠牲者であるという表象を問い直すことを試みた。韓国の基地村は異なる思惑や利害が互いにぶつかり合い、あるいは重なり合うコンタクト・ゾーンである。軍国主義、民族主義、人種、ジェンダー、セクシュアリティなどの考えが女性の体を媒介して再現される場所である。彼女たちは、人身売買され売春を強要される単なる犠牲者であるわけではなく、状況によってさまざまな力に翻弄されながらもつねに交渉あるいは抵抗を繰り返していくエイジェントであるという事実を認める必要がある。

追記

本稿は2006年京都大学大学院に提出した修士論文の一部を大幅修正したものである。同年日本国際文化学会と The first Philippine Studies Conference of Japan で発表した際いただいたコメントを生かすように努めた。一部の調査は財団法人松下国際財団の助成によって可能になった。修士論文執筆には京都大学の田中雅一教授のご指導を賜った。また、京都大学の菅原和孝教授と山田孝子教授に有益なコメントをいただいた。そして、何よりフィールドで出会った人々に各自の経験と感情を分け合っていたいただいた。ここに深く感謝を申し上げます。

注

- 1) これは、米軍基地周辺に米兵の日常的な必要物品の調達や Rest & Recreation のためのサービスを提供することを目的に形成された村である。Rest & Recreation の字義は「休息と休養」であるが、基地村でこれは「酒と女」と同意語のようである。そして、米兵に提供するサービスが主に売買春に関わる性的サービスであるために基地村という言葉自体否定的な意味を含んでいる。しか

し、物理的に米軍基地周辺に位置する村でも、その経済が主に農業などに依拠していれば基地村とは呼ばないし、韓国軍基地周辺の売買春関連地域を抱えている村も基地村とは呼ばない。そこから、基地村という言葉は、圧倒的な力を背景に優位に立つアメリカとそれに依存するしかない基地村の韓国人の存在が、否定的な意味を加えているとも言える。

- 2) 類似の問題意識から韓国人の元売春女性について論じた [徐 2007]。
- 3) 売買春をさす用語の変遷は韓国社会の関心の変化に対応して、淪落→売春→売買春→性売買に変わってきた。本稿では買春する側の米兵と売買春を成り立たせる性産業に焦点を当てるものではないという意味で売買春や性売買という用語ではなく、売春、売春女性という用語を用いる（括弧は最初の1カ所だけにつけるが、本稿でのこれらの用語はすべて括弧つきの意味である）。特に性売買という用語は2004年9月23日から施行された「性売買特別法」との関連で、売春女性を「性売買被害女性」と呼ぶことを喚起させる。しかし、一般的な意味で金銭を媒介にする性行為の現象をさすときには売買春という用語を用い、参考文献の翻訳または先行研究の引用の際は原文を重視する。
- 4) 元「日本軍慰安婦」が「民族の名」で「純潔」を取り戻したとしたら、いまなお友好関係にある米兵相手の元「米軍慰安婦」は何をもってステイグマを晴らすことができるだろうか。
- 5) 1992年10月28日、基地村の米兵専用クラブで働いていた当時26才の女性 Yun Geumi氏が米兵に殺害され遺体で発見されたが、全裸状態の彼女の子宮にはビールのビンが2本入れられ、膣にはコーラのビンが、肛門には傘が26センチも挿され、全身には洗剤が撒かれているという無残な姿であった。あまりにも衝撃的なこの事件をきっかけに、それまで存在しないかのように無視されていた基地村の売春女性たちをめぐる問題が社会の注目を浴びるようになった。
- 6) 『韓国日報』（2002年8月7日付）によると「基地村の外国人淪落女の人権蹂躪」というタイトルの記事で、「外貨獲得と韓国女性保護のため韓国政府が取り締まりを怠って」いてはこの問題は解決しないと、アメリカの時事週刊誌『タイム』が指摘したと述べている。
- 7) 以下の記事を参照。State Department Report Reveals Countries with 'Modern-Day' Slavery, and State Department Reports Many Nations not Fighting Human Trafficking, *Knight Ridder Tribune Washington Bureau*, 07/12/2001, US releases report concerning human trafficking, *Morning Edition*, 07/13/2001.
- 8) 「『人身売買国』の汚名恥ずかしい」（『韓国日報』, 2001年7月14日付）
- 9) 例外として、時事月刊誌『マル』（1998年8月）が「韓国人売春婦たちだけでなく、フィリピン人売春婦も貧困の被害者」であるという趣旨で取り上げている。
- 10) 「韓国, 人身売買防止1等級——米務省, 2段階上げ」（『ハンキョレ新聞』, 2002年6月6日付）
- 11) 「社会的に意図された」[K. Moon 2004: 303] 未知の領域という意味で使う。米軍基地と基地村がそこに存在するという意味では可視化されている。しかし、そこで実際何が起きているのかについては無関心であるし、またそれを知らないということが正当化もしくは正しいという認識があり、可視化されていながら同時に不可視化されている領域という意味を含んで使う。
- 12) 「問題多いE-6ビザ」（『週刊東亜』, 2002年12月12日発行, 363号, pp. 72-74）。
- 13) Kim は、女性の移住者が多くなる点と、移住労働の性格自体が極めてジェンダー化されている現象の2点を挙げて「移住の女性化」を説明する [Kim 2004]。
- 14) Aguilar は、出稼ぎ労働者の苦難の時期を通過儀礼にたとえて説明する。移住労働の期間はリミナルな状況で、属している共同体から分離され、苦痛を伴うが、その後帰郷したら共同体の中で新たな地位を獲得するということである [Aguilar 1999]。
- 15) エンターテイナーとして国境を越えて働く女性たちの置かれている環境はさまざまで安易に一般化することはできないだろう。花美里（筆者が調査した基地村）では、以前女性たちのパスポートや外国人登録証などの個人の書類を、移動を制限するために、クラブのオーナーが取り上げたりしていたが、現在は、必要書類はすべて女性本人が所持している。そして、2007年からはセクシー・ダンスのパフォーマンスを取りやめにしたクラブも2ヶ所現れた。同じ場所でも女性たちを

取り巻く環境が変わることが分かる。

- 16) 2003年4月13日に行われた「平澤地域米軍基地運動大討論会」の資料集参考。
- 17) 彭城邑事務所提供統計。
- 18) 注1) 参照。
- 19) ここで使われるデータはすべてフィールドワークによるものである。インタビューには録音の許可を得たフォーマルなものと日常的に交わした会話などのインフォーマルなものの両方が含まれている。使用言語は英語と日本語、そして村人に対しては韓国語である。
- 20) 米兵は平日深夜0時、週末は1時までという門限が決められているので、クラブはその後の時間帯に韓国人や外国人労働者を受け入れる場合がある。異人種に対する人種差別とセクシュアリティの交差については[Paek 2000] 参照。
- 21) 仮名。以下人名はすべて仮名。
- 22) フィリピンの業者や韓国のプロモーターの中で自分を担当する人の名称で、呼称はパパである。性産業でパパという呼称はピンパ（ポン引き）を連想させる。
- 23) 男性客がお金を払って女性とクラブの外で一緒に時間を過ごすことである。女性はそれを必ずしも性交渉と結びつけているわけではないが、200～250ドルを払った客のほうからは必ずといっていいくらい性交渉を含意していると思われる。
- 24) 本稿の4章3節（4-3）参照。
- 25) 中には再契約で2度目の渡韓であったり、日本での契約を終わらせてつぎに韓国に来たりする女性たちも珍しくなく、彼女たちは正確に仕事の内容を把握している。
- 26) この話者は韓国への出稼ぎが今回2回目で、最初に稼いだお金で兄弟の学費を払った話を以前聞かされた。
- 27) しかし、すべての女性がそうだとは言えない。インタビューができた女性の中ではっきり米兵との結婚を考えていないと答えた人はリリー（30才）とマリア（28才）の2人だった。つぎはマリアの語りである。「彼ら（米兵）はクラブで働く私たちを道徳的に疑わしいと思うかもしれないが、私だって、クラブを転々としながら女性たちと遊びまくる彼らを信じられないよ。『愛している』、『結婚しよう』と言うけど、いつ変わるかわからない」。
- 28) ナイト・アウトを提案されたときの女性（ジャスミン、27才）の返事参照。

参考文献

- 青山 薫 2005 「「セックスワーカー」と「性奴隷」のはざまで暮らす、普通の女たち——グローバル性産業の中のタイ女性の場合」『女性学』13: 76-93。
- 浅野千恵 1998 「混迷するセックスワーク論」『現代思想』26 (8): 117-125。
- 江原由美子（編）1995 『性の商品化——フェミニズムの主張2』勁草書房。
- 徐 玉子 2007 「犠牲者の表象を乗り越えて語り始めた女たち——韓国京畿道における米兵相手の元「売春女性」をめぐる」『人文学報』95: 105-136。
- 田中雅一 2002 「主体からエージェントのコミュニティへ——日常実践への視角」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社, pp. 337-360。
- 武田 丈（編）2005 『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー——エンパワーメントとその支援』関西学院大学出版会。
- DAWN（編）2005 『フィリピン女性エンターテイナーの夢と現実——マニラ、そして東京に生きる』明石書店。
- 宮台真司（他）1998 『〈性の自己決定〉言論』紀伊国屋書店。

Aguilar, F. V. J. 1999 Ritual Passage and the Reconstruction of Selfhood in International Labour Migration. *Sojourn* 14 (April): 98-139.

Barry, Kathleen 1995 *The Prostitution of Sexuality*. New York University Press.

- Chapkis, Wendy 1997 *Live Sex Acts : Women Performing Erotic Labor*. New York, London : Routledge.
- Cheng, Sea-ling 2000 Assuming Manhood: Prostitution and Patriotic Passions in Korea. *East Asia : A Quarterly Journal* 18 (4) :40-78.
- 2002 '사랑을 배우고 사랑에 죽고', "용감한 여성들, 늑대를 타고 달리는". (막달레나의 집 엮음) 삼인. 2002 (『愛を習って愛のために死んで』『勇敢な女性たち, 狼に乗って走る』 Magdalena-ui-jip ed.)
- Jeong, Huijin 2005 "페미니즘의 도전: 한국 사회 일상의 성정치학", 교양인. (『フェミニズムの挑戦——韓国社会における日常の性政治学』)
- Kempadoo, Kamala & Jo Doezema, 1998 *Global Sex Workers : Rights, Resistance, and Redefinition*. New York, London :Routledge.
- Kempadoo, Kamala, Sanghera, Jyoti & Bandana Pattanaik, 2005 *Trafficking and Prostitution Reconsidered : New Perspectives on Migration, Sex Work, and Human Rights*. Paradigm.
- Kim, Hyeonmi 2004 "친밀성"의 전지구적 상업화: 한국의 이주 여성 엔터테이너의 경험, "여성이론" 11 : 68-102. (『『親密性』のグローバルな商業化——韓国の移住女性エンターテイナーの経験』『女性理論』)
- Lee, Na Young 2006 *The Construction of U. S. Camptown Prostitution in South Korea : Transformation and Resistance*. Ph. D. dissertation submitted to the faculty of the graduate school of the University of Maryland.
- Moon, Katharine H. S. 2004 '한국 기지촌의 여성', "한국현대 여성사" 정진성 / 안진외 지음 한울아카데미. (『韓国基地村の女性』『韓国現代女性史』 Jeong Jinseong & An Jin 編)
- Nussbaum, Martha C. 1998 Whether from Reason or Prejudice: Taking Money for Bodily Services. *The Journal of Legal Studies* 27(2):693-724.
- O'Connell Davidson, Julia 1999 *Prostitution, Power, and Freedom*. University of Michigan Press.
- Paek, Jaehui, 2000 '외국여성의 한국 성산업 유입에 관한 연구: 기지촌의 필리핀 여성을 중심으로', 이화여대대학원 석사논문. (『外国女性の韓国性産業への流入に関する研究——基地村のフィリピン人女性を中心に』梨花女子大学大学院女性学専攻修士論文)
- Ruiz-Austria, Carolina S. 2006 Conflicts and Interests: Trafficking in Filipino Women and the Philippine Government Policies on Migration and Trafficking. In Karen Beeks & Delila Amir eds., *Trafficking and the Global Sex Industry*. Maryland: Lexington Books, pp. 97-117.
- Sturdevant, P. Sandra & Stoltzfus, Brenda 1993 *Let the Good Times Roll : Prostitution and the U. S. Military in Asia*, New York: The New Press.
- Suzuki, Nobue 2000 Between Two Shores: Transnational Projects and Filipina Wives in / from Japan. *Women's Studies International Forum* 23 (4) :431-444.
- 2002 Gendered Surveillance and Sexual Violence in Filipina Pre-migration Experiences to Japan. In Brenda Yeoh, Peggy Teo & Shirlena Huan eds., *Gender Politics in the Asia Pacific Region*. London :Routledge, pp. 99-119.
- Whelehan, Patricia 2001 *An Anthropological Perspective on Prostitution : The World's Oldest Profession*. New York, Ceredigion: The Edwin Mellen Press.
- Willis, Katie & Brenda Yeoh 2000 Introduction. In Willis, Katie & Brenda Yeoh eds., *Gender and Migration*. Northampton: Edward Elgar.
- Yea, Sallie 2003 Connecting Gendered Violence and Trafficking of Women. Paper based on a presentation at the Stop the Traffic Conference.
- 2004 Runaway Brides: Anxieties of Identity of Trafficked Filipinas in South Korea. *Singapore Journal of Tropical Geography* 25 (2) :180-197.
- 2005a When Push Comes to Shove: Sites of Vulnerability, Personal Transformation and Trafficked Women's Migration Decisions. *Sojourn* 20: 67-96.

——— 2005b Labour of Love: Filipina Entertainer's Narratives of Romance and Relationships with GIs in US Military Camp Towns in Korea. *Women's Studies International Forum* 28 (6) : 456-472.

Yi, Seongsuk, 2002 “매매춘과 페미니즘, 새로운 담론을 위하여”, 책세상. (『売買春とフェミニズム, 新たな言説のために』)

* 韓国語文献の著者名の表記は韓国文化観光部2000年7月7日公表したローマ字表記に従った。